様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４７５

研究課題名（和文）南アジアの山岳少数言語における文法の複雑化

研究課題名（英文）Complexification in the South Asian languages in hill areas

研究代表者
小林　正人（Kobayashi, Masato）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：９０３３７４１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：インド・チョーターナーグプル丘陵で話されるドラヴィダ語族のクルフ語とオーストロアジア語族のコルワ語の調査を中心として行った。コルワ語については、録音をもとに書き起こしを進め、グロス付きテキストを３点公刊し、それに基づいた文法研究を１点発表した。
クルフ語に関しては、インタビューおよび現地調査によって文法調査を行った。文法記述と収集したテキストに語注と訳を付したもの、および辞書をまとめて Bablu Tirkey と共著で The Kurux Language として Brill 社から刊行した。クルフ語についてはほかに論文や研究発表を行った。

研究成果の概要（英文）：During the period, I mainly studied two languages, Korwa (Austroasiatic, Chhattisgarh, India) and Kurux (Dravidian, Jharkhand, India), and also its dialectal varieties. For Korwa, I conducted fieldwork in Jashpur and Surguja Districts, Chhattisgarh, every year, recorded Korwa narratives, transcribed, glossed and translated them. I published three of such texts, read one paper on the past tense suffixes of Korwa, and submitted a paper based on the presentation for publication.
For Kurux, I described the grammar based on interviews with my Kurux consultants conducted in Tokyo and in Gumla District, Jharkhand, transcribed, glossed and translated recordings, and compiled a lexicon, with the help of Bablu Tirkey. The result was published as The Kurux Language, co-authored with Bablu Tirkey, from Brill in 2017. This book contains grammar, texts and lexicon of Kurux.

研究分野：言語学

キーワード：Korwa　Austroasiatic family　Kurux　Dravidian family　linguistic description　linguistic fieldwork

１．研究開始当初の背景

申請者は 2005 年度から 6 年間デカン高原東部ラージマハル丘陵においてマルト語（ドラヴィダ語族）の調査を行った過程で、マルト語が他のドラヴィダ語族言語に類を見ないほど複雑な一致現象を、村ごとに大きな変種をともなって発達させてきたことを発見した (Kobayashi 2013)。一例を挙げると、「～のために」を意味する後置詞が、それが出現する文の主語との一致を標示するという特異な形態法が、マルト語の一部地域においてのみ発達している。このような複雑化は、マルト語話者が二言語併用しているサンタル語（オーストロアジア語族）からの干渉として説明することは難しく、言語接触以外の内的動因によらなければ説明できないと考えたことが、本研究の出発点であった。

２．研究の目的

南アジアのいくつもの地域において、大言語に隣接する少数言語、なかでも山岳地帯など地理的に隔絶しやすい地域の少数言語が、独自の複雑化を遂げている事例があることを探究したい。例を挙げると、チョーター・ナーグプル丘陵のクルフ語（ドラヴィダ語族）は地域共通語のサドリー語（印欧語インド・アーリア語派）と濃厚に接触しながら、サドリー語にはない「女性間活用」（話し手と聞き手が女性の場合のみ現れる活用形式）という独自の動詞活用カテゴリーを発達させている。チャッティースガル山地の狩猟・農耕民が話すエルンガ・コルワ語（オーストロアジア語族）はサドリー語、クルフ語と接触しながら、そのどちらにもない、モダリティと結びついたと考えられる否定辞の区別を発達させた。パキスタン・バローチスタン丘陵のブラーフイー語（ドラヴィダ語族）は、バローチー語（印欧語イラン語派）との長年の接触にもかかわらず、側面摩擦音といったバローチー語にない特徴を堅持し、形態法においては否定活用などバローチー語にない複雑化がブラーフイー語内部で進行したと言われる。音韻に関して例を挙げるなら、ニルギリ丘陵のトダ語（ドラヴィダ語族）は摩擦音の少ないタミル語・カンナダ語（ともにドラヴィダ語族）地域に隣接しながら摩擦音を多く含む特異な音素体系を発達させたことが知られている。

言語変化においては社会的要因が重要であることは、W.ラボブをはじめとする社会言語学者の調査によって繰り返し指摘されており、ここに例を挙げた言語の接触においても、少数言語がその特異性をアイデンティティの反映や、時には話者かどうかを識別するシボレットとして保持し、発達させている可能性もある。南アジアの言語は少数民族や内婚制社会集団としばしば重なっており、本研究ではそうした社会的要因についても可能な限り考察する。

３．研究の方法

申請者はクルフ語とマルト語に関してはこれまでの調査によって文法記述をほぼ終えており、それらを隣接する大言語であるサドリー語、サンタル語とそれぞれ比較することによって、まずは両言語でどのような複雑化が起こったかを洗い出す作業を行う。この作業によって、エルンガ・コルワ、マンデアーリー、ブラーフイーという３つの未研究、または研究の少ない言語の調査を新規に行う際、どの部分を重点的に調査すれば特異性が見つかりやすいかを予め絞り込むことができ、4 年の期間内に３つの言語の記述と検討を行うことが可能になると考える。

エルンガ・コルワ語とマンデアーリー語に関しては、ともに文法記述が皆無であり、前者の小規模な語彙集（Bahl 1962）が存在するのみであるため、現地調査によって例文および自然談話を収集・録音して基本的文法記述を期間内に作成する。ブラーフイー語に関してはペルシャ・アラビア文字による出版も存在するが、母音が表記されないなどの理由から非母語話者にはほぼ利用できず、自然談話を録音して書き起こしたテキスト・コーパスの作成を進め、それを基にしてより精密な文法調査を行いたい。

各言語を調査する前に、すでに調査の進んでいるクルフ語とマルト語から複雑化の例を抽出して分類し、言語のどのような側面で複雑化が起こりやすいかを洗い出して、現地調査のために調査項目に優先順位をつけた調査票を作成する。ついでエルンガ・コルワ語、ブラーフイー語、マンデアーリー語の現地調査を順次行い、まず話者と面談して基本的文法を調べ、それを記述する作業の中で複雑化が起こっているかをさぐる。次に上記３言語の自然談話を録音して書き起こし、その際に隣接する言語に見られないような文法上の特異性を探し、見つかったものに関しては、それが複雑化の事例に該当するかを検討する。そのようにして、これら別語族の３言語の記述を行いながら、山岳地帯で隔絶したこれらの言語が周囲の大言語と比較してどのような変化を遂げているかを検証する。

４．研究成果

本研究においては、当初計画していたブラーフイー語とマンデアーリー語の調査を実施することができず、多地域での比較を行うに至らず、インドのジャールカンド州、チャッティースガル州、オリッサ州にまたがる高原地帯での調査に集中せざるを得なかった。

クルフ語に関しては文法とテキスト、語彙の調査を重ね、話者である Bablu Tirkey とともに書籍としてまとめ、Brill 社から The Kurux Language として出版することができた。コルワ語についてもテキストの出版を通して文法構造の理解が進みつつある。特に複雑である動詞の時制接辞に関しては、anterior, past, perfective, completive という４つ

の機能に分けられることを提案した発表を国際セミナーで行い、論文として提出した。

言語が変化するとき、もともと複雑であった区別が単純化する方向で起こることが多い。しかし、少数言語と大言語の接触においては、単純化ではなく形態や音韻の複雑化という言語変化が起こる場合が少なからず見られることが、申請者の南アジア山岳地帯の言語の研究で明らかになった。これらの言語はそれぞれ環境も社会的状況も異なるが、いずれも単一の民族もしくはカーストのみが用いるという点で共通しており、他の集団と離れていく方向での変化が起きやすい素地を共有している。

本研究を通して、複雑化といっても、ゼロから新しいものが生じるわけではないことも分かった。例えばクルフ語の女性間活用は、まったく新しく生じたカテゴリーではなく、オリッサ州で話され、クルフ語の１方言ともみなされるキサン語においては、男性話者にも使われる活用形であることが分かった。同義の活用形が複数あり、もともとレジスターの違いによって使い分けられていたものが、女性同士という文脈に限定されるようになったものとみられる。エルンガ・コルワ語の否定形も、形態自体は独自のものだが、他のケルワル語にも複数の否定形態素があるものがあり、使い分けは昔からあった可能性が高い。

山地において言語に独自の変化が起きることについては、東南アジアの「ゾミア」などの例が報告されているが、複雑化という方向の言語変化は、世界的な報告例が少ないこともあり、説明できるメカニズムはいまだ提案されていない。本研究を通して収集した、地理的に隔絶した南アジアの少数言語における文法の複雑化の実例をさらに検討し、その言語内部、および社会言語学的要因を解明することによって、なぜ言語には弁別上必要とされる以上の複雑性をもつことがあるのか、さらには言語の多様性が何に起因するのか、といった問題を解明することに寄与すると期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

1. Masato KOBAYASHI and Tetru ORAON, Kurux. Sanford Steever (ed.), The Dravidian Languages, 2nd ed. London and New York: Routledge. 印刷中

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 小林正人. クルフ語の自発使役構文. 日本言語学会. 立命館大学. 2017 年 11 月 25 日.

2. Masato KOBAYASHI. Kurux Expressives. Research on Expressives in Asia. 京都大学東南アジア研究所. 2017 年 8 月 23 日.

3. Masato KOBAYASHI. The past suffixes of Hill Korwa. International Seminar of Munda Linguistics. Pune. 16 March 2017.

〔図書〕（計 3 件）

1. Masato KOBAYASHI and Bablu Tirkey. *The Kurux Language*. Leiden and Boston: Brill. 2017.

2. Anjani KUMARI, Masato KOBAYASHI and Tetru ORAON (eds.) *Khatrka Ropnas gahi Tungul*. Bendora: Manas Prakashan. 2017.

3. Anjani KUMARI, Masato KOBAYASHI and Tetru ORAON (eds.) *Sava Rupiya Khatri*. Bendora: Manas Prakashan. 2017.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/kurux,
http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~masatok/TGM,
http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/ernga

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　正人（Kobayashi, Masato）
東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授
研究者番号：90337410

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)